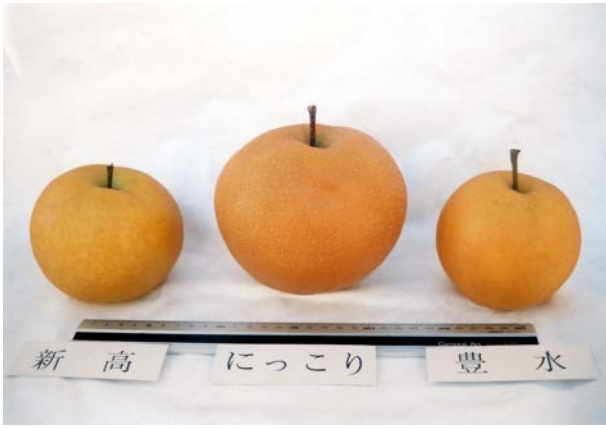


# 夢の梨品種を開発せよ！

大玉で食味の良い梨「にっこり」の育成

冷たい夏は、梨の消費を激減させ、また品質低下による価格暴落を引き起こします。梨農家はこの凶事に、今までは呆然とし意欲を失ってききました。しかし、今、農家には希望の火がともっています。それは新品种「にっこり」があるからです。

今回は、梨「にっこり」の誕生のプロジエクトを紹介します。



夢の梨品種「にっこり」(中央)

## ■ 梨を愛した研究員

「金子君、新高頃の梨の育種をしたらどうだい」。昭和五十九年春、栃木県農業試験場果樹部長青木秋広が主任研究員の金子友昭に言った。この一言が、後に「にっこり」の誕生につながる。

夏から秋の味覚として人気の梨は、昭和五十年代後半には新水・幸水・豊水の時代に入った。これまでの主力品種長十郎は八月下旬から十月中旬まで収穫できたが、これらでは九月に終了。そこで、十月上旬・中旬に収穫できる品種の必要性が高まってきた。しかし、この時期に収穫できる品種は新高のみ。新高は消費者に喜んでもらえる美味しい梨ではなかった。

梨の育種はとにかく時間がかかる。現在の主力品種である幸水は交配から品種登録までに十八年を要した。成果が現れにくいこの仕事は、国の果樹試験場くらいし

か手がけていなかった。当然、栃木県でもやる予定はなかった。しかし、青木は長い経験から、梨の新品种開発に取り組まなければならないと考えていた。金子は梨の研究一筋十五年の大ベテランで、何よりも梨を愛していた。青木の言葉が頭から離れなかった金子は、小規模でも実施すれば新品种育成の可能性はあると考え、課題化せずに梨の育種を行うこととした。

## ■ こんな梨いららない

昭和五十九年春、手始めに新高と幸水・豊水を交配した。金子の梨に対する情熱は誰にも負けないものがあつたが、育種の知識・経験は多くなかった。今思えば非常に安易な組み合わせであつたが、現存する梨品種が肉質優先から二十世紀の血を引くものがほとんどで、新高は二十世紀に由来しない数少ない品種だった。これが功を

奏し、にっこりの様な素晴らしい特性を誘発した。

昭和六十年三月、交配した種子をほ場の一角に播種。得られた実生苗は「新高×豊水」三十二個体、「新高×幸水」六十個体。翌六十一年四月、早期結実をねらい長十郎にこれらを高接ぎした。この時、実生苗に番号を付与。後の「にっこり」は「二一十一」であった。平成元年秋、初結実。接ぎ木してから三年目のことであった。

交配系統の大部分の熟期は九月、目標とした新高クラスのものは無かった。金子は大規模に育種ができないうもどかしさを感じながら半ばがっかりしていた。そして初めての果実調査。両親の特性を超えて大きな果実の二一十一を食べた。素晴らしい肉質だった。果実は甘くはなかったが肉質は良かった。大玉で熟期が十月下旬から十一月上旬と目標よりかなり遅いこの系統に金子は魅力を感じた。不思議なことに平成二年、三年とするうちに二一十一は甘みを増した。

金子は高まる期待から何人かの梨農家に「こんな梨があるんだけ

「どうだろう」と話した。しかし、幸水、豊水の二品種で安定した経営ができた時代で、いずれも「そんなに遅い梨はいらない」との冷めた返事しか得られなかった。金子はそんな言葉を聞いて二一十一の品種登録をあきらめた。

### ■ この梨は売れる

平成四年秋、農協や普及関係者で組織された首都圏園芸技術者連絡会議果樹部会の梨試食会が、農業試験場の大会議室で開催された。この会のテーマは、新高以降の梨品種をどうするかであった。しかし、この時期の品種は少なく、会が盛り上がりげだと思えば金子は二一十一を出展した。

検討会では大田原市で栽培が始



にっこり生みの親金子(左)と高橋(右)

まったかおりと二一十一が話題となった。栃木県経済連(現JA全農とちぎ)園芸課技術参与麦倉勲と調査役大山登は二一十一の試食後、「これは絶対に売れる、名前を付けてぜひ出すべきだ」と発言。麦倉は味が良い点を、大山は東京事務所に行った経験からの意見だった。金子はこの言葉に大きな感銘を受けた。その後、農家のリーダーで組織される農業士会果樹部会でも二一十一が試食され、高い評価を得た。金子はこれらの応援もあって、二一十一の種苗登録出願を決意した。

### ■ 夢の梨誕生

平成五年、金子から育種の仕事を受け継いだ主任研究員の高橋健夫は改めて種苗登録に向けた調査を開始。この年は本年と同じく冷夏で、梨の価格が暴落。農家は希望を無くしていた。高橋はこの惨状を解決するために二一十一の一日も早い登録を決意した。

ここで一つ問題があった。それは名称。新品种はインパクトがあり、かつ親しみやすい名前でない

ればならない。高橋はこのプレッシャーから眠れない日々を過ごした。ある日偶然テレビを見ていると日光を特集していた。「そうだ! 栃木県が世界に誇る「日光」と「梨」を合わせて「にっこり」だ」。食べてにっこり、作ってにっこり」の思いも名前に込めた。

品種登録出願審査は、毎年三月末日までに出願されたものを翌年度に実施する。高橋は年度内に出願できるように寝ずに働いた。その結果、平成六年三月三十一日付で種苗登録出願した。

梨の品種の出る確率は七百分の一、全国的に普及できる品種は七十分の一と言われている。にっこりはまれに見る幸運といえる。

平成七年十月、天皇・皇后両陛下が行幸啓の際、農業試験場に来場。この時、にっこりをお手に取り「とても優しそうな良いお名前ですね」と皇后陛下がにっこりと微笑まれたのがとても印象的であった。

### ■ おわりに

にっこりは大玉で食味が良く



にっこりをご覧になる両陛下、右は金子

正月過ぎまで貯蔵ができ、また多収で収益性が高い、消費者にも農家にも喜ばれる夢の梨品種である。金子は育成にあたって「にっこりは野球で言うヒットを狙ってホームランが出た」と正直な感想を漏らしていた。しかし、「まだ目標の新高クラスの品種ができていない。本当の意味で育種は始まったばかりだ」と考え、現在、果樹研究室の研究員達はその意志を受け継ぎ、新たな夢の新品種育成に向けて頑張っている。

(敬称略)  
「農業試験場」